

無題

山城34回 谷 口 代司夫

まず同期のみなさんを代表して私がこの文集に執筆させて頂く事に、非常におこがましさを感じております。

さて、私がまだ小学生の頃の事です。その頃から、ずっと山城高校に入学する事を頭に描いていた記憶があります。その理由は、五歳離れた兄がおり、彼もまた山城高校に通っていた一人です。その兄が山城高校在学中、いつも家族団樂の一時に山城であった面白い話や事件、森はん（当時サッカー部顧問の森先生）や当時ご健在であった、つんさん（体操部顧問の辻先生）のエピソードなんかを面白可笑しく話してくれた事によります。当時の印象は、なんと自由な学校なのだろうと、間近に進学する中学を通り越して山城高校の学生になった時の事を思い描いていたことを、今でも鮮明に記憶しています。その後、中学に進学と同時にサッカー部に入部する事になった私は、次第に山城高校サッカー部の歴史を耳にする事が多くなり、まして入学すればその指導者である森先生に教えてもらえらると思ひ、

私の中で山城高校への憧れが次第に増して行きました。ところが中学二年になったある日、私にとっては大きな事件（出来事）がありました。それは、山城の校区を離れた所に新しく家を購入し、引っ越すという事になってしまった事です。勿論そうなれば、中学も転校しなければなりません。しかし、私にとって中学の転校が問題ではなく、山城でサッカーが出来ない事に大きな問題があった訳です。その話から引っ越すまでの間、『絶対に自分は引っ越さない。もし転校したらその中学で愚れてやる』などと言い張り、当時はさぞかし親を悩ませた事であろうと思います。幸い引っ越す前の家を手放す訳ではなかった為、住民票を移動させる事も転校する事もなく、結果山城に入学出来た事で現在の執筆にも携わっているという訳です。そして現実も、まるで学園ドラマに出てくるような、授業中に早弁したり、さぼって喫茶店に行ったり、先生が来られる前に教室に仕掛けをしたり、ここにはこれから入学する子や在学中の子に配慮して執筆できないような事がまだまだ一杯あり、予想以上に楽しい学生生活を送らせてもらいました。この事は、私の社会人としての人生にも大いに役立っていると同時に、この執筆を通じて、当時の同級生や先生方に今更ながら感謝致します。出来る事なら、私の子供達にも山城に通ってもらいたい気持ちで一杯です。